（国語学・第二十三輯）があったこと、さらには、ここでは、一々取上げる余裕はなかったが、雑誌「解釈」に短編ながら、解釈文法について好論文が散見したことを始め、解釈文法にも多くの業績があったことを、附言しておきたい。

―国立国語研究所所員―

四、国語史・国語学史

鎌倉期以前

小林芳規

最近の国語史の学としてのあり方についての諸意見は、それが未だ十全の形を持たないため不問に付すとして、従来の見方によれば、「国語史」というとき、国語の各種の現象を通時的に把握する立場での論究が対象となるものと、わたくしは考える。現代語に対するところの過去の言語の考察を、もしこの分野に含めるとすれば、それは便宜的方法であって、厳密な意味の「史」ではない。前者によって展望を試みれば、その対象はきわめて限られた少数となろう。本誌が国語問題・方言学・国語教育・国語学一般に対して国語史・国語学史を立てて展望を行うのは後者における論述を含めている便宜的なものと考えられ、国語学界の展望という点より止むを得ないことであろう。ここ数年来の展望もそのようである。その意味で分類も総記・上代・中古・中世・近世・近代と紋切型によった。さて、ここで問題となるのは「国語学一般」との連関である。無論他の分野にも史的なものはあるが、それとの重複は認めるとして、国語学一般例えば文法論を一時代特に現代のみに限ってたてることは便宜主義であり、理想的にはあらゆる時代を一挙に扱わねばならないとすれば、「国語史」を右のように拡大したため重複が多く生ずることになる。その多くは論述の重点のあり方で解決するものであろうが、なお困難なものについては国語史の立場、わたくしとしての意見を特に述べたい折にはともかく、なるべく再述を避けるよう努めた。学術論文に二つの理解の仕方はありうべからざることである。（このため今までとったメモの中からいくつかを捨てたりもした）

この分野でも数多くの秀れた業績があった。研究者は各自その課題に向って進まれる。それゆえに種々雑多で、展望の便宜主義も必要となるわけであるが、これらを鳥瞰通観する時、次のような傾向が、偶然であろうが目につく。

a、同一または類似問題についての論争。

b、既成概念の再検討。

c、啓蒙的概説書および啓蒙論の輩出。

などであり、又学問研究のあり方として、d共同研究は今年も或るグループによって成果を着々と挙げており、漸次専門化するこの学問にあってその方法の増加と発展が特に期待される。これはこの年多かったわけではないが、aとうらはらで展望を試みている間に、またわたくしの最近の立場より痛感したので特記する。また、cの傾向については無論啓蒙的ながら新見を含むものもあるが、それはともかくなるべく論及しないように努めた。なお口頭発表のものは一切ふれないことにした。ともあれ、これらの傾向に注目しつつ、論ずるつもりであるが、その一色で塗りつぶ

そうとする意図はない。各研究者による複雑な成果を複雑なままに把えありのままに展望することに、より大きな意義があるからである。

稿に志してより、机上には関係論文が山積みされて日月が経った。次第に少くなるその山を眺めながらも、執筆者が長い時間と多くの労力をかけて物された労作を、短時日と短文で処理することの失礼と困難さをたえず気にしつつもこのような蕪稿をなすことになった。多くの力をつくしても、到底わたくしごとき浅学菲才の輩のよくするところではない。非力により、誤解や粗漏の生じた点はあらかじめ深くお詫び申しあげる。最後に敬称はなるべく簡略に従ったことを付言する。

総　記

国語史という学が厳密な意味において成立しうるかどうか。もし可能であるとすればどのようにあるべきかの問題は近年漸く反省の色が濃くなった。わたくしの見るところでは言語を歴史的現象として認めることの可否の論に端を発し、規範・権威に対する抵抗意識を重視する立場から把えようとする論が現われ、新しい国語史のあり方が追究されようとしてきた。このような趨勢にかんがみ、国語学会（京都）で「古代語から近代語へ」と題して研究発表会（五月）を開いたことは、有意義な試みであった。そしてその結果は「国語学」22輯（九月）に特集された。亀井孝氏「近代日本語の諸相の成立」は、日本語は外国語に比し保守的で、論題についても、日本語の中でどの部分が変化しなかったかという把え方も大切であるが、強いてその展開を求めると、新しい口語的表現の確立と表現に関する選択の自由の増したこととして把えられるとする。講演要旨で概説的であるが、示唆に富むものである。塚原鉄雄氏「国語史はどんなふうに把握されてきたか―素描国語史学史―」は国語の史的把握の過去における研究の素描であるが、「国語史」のあり方を反省する時、当然起るべくして起った論であり、それはまた「国語史」研究のよりよき将来を志向する意味においても注目すべきである。森重敏氏「文法史の時代区分」（ただし研究会での発表はされなかった。）は理論的根拠として断続と論理との両関係を根柢的な文法的事実と認め、その両関係の変遷より古代（推古天皇の頃より南北朝期末まで）・中世（室町期初頭から徳川期明和年間まで）・近代（徳川期安永年間から現在まで）を設け、口語・文語の別は文体の相違による言語の内容に関するもので文体史・文学史等と共に厳密には文法史と区別されなければならないとする。従来の任意的区分に対する反省と、言語の「歴史」に対する新しい見地より得た概観で、氏の文法理論の体系だてへの初段階をなすものでもあり、今後の発展がのぞまれる。

部門史ではアクセント史に関して金田一春彦氏「古代アクセントから近代アクセントへ」の秀れた論考があるが、国語学一般（前号）で述べられたところである。井手至氏「文脈指示語に対する漢文訓読の影響」は文章展開に関して先行の表現内容を指示する語に現代語においては概してコソアドの体系に忠実であるが、和文系を除いた古代語には漢文訓読の影響によって、近称の語が称とは無関係な（絶対）指示に用いられ、またそれを含む接続詞が多いとの比較。同輯には浜田敦氏「国語音韻体系に於ける長音の位置―特にォ段長音の問題―」橋本四郎氏「ベシ・マジの接続

面の混乱」寿岳章子氏「形容詞の語彙的変遷—中古から中世へ—」があるが、「室町期」で論及していただく。

別に井手至・塚原鉄雄・浜田敦三氏「国語副詞の史的研究」は昨年度について、共同研究により着実な成果を収めている。㈠「せめて(井手氏執筆)」「あながち・に(浜田氏執筆)」(大阪市立大学国語学研究調査冊子第二冊—人文研究5号、五月)、㈡「『なかなか』の展開(塚原氏執筆)」(同第三冊、九月)がそれである。内容については鈴木氏のあげられたところ、意義ははじめに述べたとおりである。

単行本としては待望の時枝誠記博士『国語学原論続篇』(岩波書店、九月)が刊行された。「言語史を形成するもの」の章は国語生活史としての国語史のあり方を提唱されたもので、雑誌発表当時より注目されたもの。『助詞の歴史的研究』(岩波書店、十一月)は、故石垣謙二氏の生前発表された論文五編および新に公表された一編の論文集。言語自体に内在する変遷の必然性を探ることを説く「助詞史研究の可能性」に基づく他の格助詞を主とする精緻な実証的な、通時的考察の諸論考も高く評されている。

国語学会創立十周年事業として企画され、二年余の年月を経て八月末刊行をみた「国語学辞典」(東京堂)は前記Cの傾向の雄なるものであるが、国語史関係の記事も多く、最新の成果も入り専門のいかんをとわず斯道に関心を持つ人々の必携の書である。付録の「国語史年表」はその内容よりも企画そのものに問題もあったが、始めての試みであり一応便利。なお今後のたえざる訂補により、より良いものとなろう。『折口信夫全集』(第十九巻・国語学篇)(中央公論社二月)に見える「形容詞の論」「さうやさかいに」などの諸篇には実証はともかく心惹かれるものがある。

上代

日本語系統論に関しては大野晋氏の概説的要約が『世界言語概説』下巻(市河三喜・服部四郎両博士編、五月)に収められ、この分野の最近の業績が知られる。金沢庄三郎博士「朝鮮の字音」(国語学21輯、六月)は、わが上代文献中に朝鮮の古字音に由来する語を指摘され、この方面よりの研究の反省を強調される。古代日鮮両語にはかつて密接な関係のあったろうことは先学によって明らかにされて来たところであるが、近く亀井孝氏も同誌十六輯(二十九年三月)で朝鮮語 pi と日本語イトとの対応の可能性を論ぜられ、更に村山七郎氏「亀井孝『ツル』と『イト』」を読みて」(国語学20輯、三月)も亀井氏が否定されたツルも—確実な論拠を欠くが故に—従来通り日本語系統論のための比較語彙から除く必要はないとされ、日鮮語の関係を認められようとされた。しかし亀井氏の論は言語を比較研究するものに対する警告として傾聴すべきである。また、金関丈夫博士「八重山群島の古代文化—宮良博士の批判に答う」(民族学研究十九ノ二号、九月)は琉球列島の方言に南方系言語の遺物を認めうると推測されている。無視すべき書であるが一言、『万葉集の謎』(安田徳太郎氏、光文社、十一月)はこの年の終り、一頃世を騒がしたもの。日本語の祖先はヒマラヤの谷底にいる二万たらずの民族の言語だとの考えが、国文学の地動説と銘打たれて、専門の国文学者(安田氏の用語のまま)に不信任状として出された。それは一部の読

者には恰も事実かの如く印象づけられ、「国語学者の積極的批判を」（木村浩氏週刊サンケイ五六年二月二六日）などの声もあり、週刊紙などであおり立てた。これに対しては大野晋氏の徹底的批判「誤と偽りの『万葉集の謎』（知性、三十一年二月）」「レプチャ語とはどんな言葉か（文学、三十一年三月）」があるので贅言しないが、安田氏の方法は音韻的、意味的に似かよった単語を比較して深い証明も材料もなく、両者を同一のものとみなす悪例の好見本である。しかし一方かかる書を民間にはびこらせるに至った編集者・出版社も責任を反省する要があるのではないか。これを機に学問と一般大衆知識との関連について考える要があろう。

北方系・南方系いずれの系統であるにせよ、古代日本語の成立は基層南方語に、後来日本語が順次同化した過程として見るべく、この点より国語史、方言史等を捕えようとされる福田良輔氏の諸論文がある。「古代日本語の成立過程―弥生式文化を土台とする社会変革との連関において―」（国語学21輯、六月）は氏の先行数労作の総括と見通しで、後来日本語は弥生式文化と共に朝鮮をへて、各地に基層語の影響をうけつつ方言的様相を示しながら伝播した。「奈良時代東国方言とその基層語」（国語国文、十一月）は右の見地より東国方言の成立を論じられたもので主として万葉集巻二十の東歌の詳細な検討の結果、中央語、西部日本語の甲乙両類母音の区別の混乱は基層蝦夷語の影響によるものとされる。更に、「奈良時代東国方言の周辺―言語基層・八丈島方言・補説―」（文学研究五十三輯十二月）は八丈島方言の古語にも論及されている。このいずれにも人類学等の最新の成果を援用され、とかく実証性を欠き易いこの種の基礎づけをされている。

音韻関係では、まず故有坂秀世博士の遺稿『上代音韻攷』（三省堂、七月）の偉著がある。（鈴木氏が紹介ずみ）大野晋氏、頼惟勤氏「万葉仮名の字音研究の手引き」（万葉集大成一一）は中国字音およびその歴史についての解説。

上代特殊かなづかいに関しては面白い論争があった。大森志郎氏「上代仮名遣いから見た邪馬台国の擬定」（東京女子大学論集Ⅴノ2、三月）は、まず魏志倭人伝中の「邪馬台（ト乙類）」と上代文献のヤマトの用字法の比較検討により邪馬台の九州説を否定し、重大なかつ多くの国史家に論ぜられ続けられてきた問題に終止符を打とうとした。歴史研究に国語学の成果を応用されたのは注目すべきだが、実はこれは浜田敦氏説の踏襲である。大森氏には成書『魏志倭人伝の研究』（宝文館、六月）がある。これに対し、田中卓氏「邪馬台国の所在と上代特殊仮名遣」（国語国文、五月）は九州説の氏が右の両資料の時代的隔り、影響関係、トの混乱などより反駁された。浜田説は動かないにしても、国語学による文化現象の考察には自ら限界があり、ことが古代史の基本問題だけに傍証となりえても、唯一のきめてとするには危険を覚える。同様な論考が同じく国史学の分野にもう一つあった。松本雅明氏「古事記の奈良朝後期成立について」（史学雑誌64ノ8・9、八・九月）はその所用仮名の字数を他の文献との多寡の比較により、古事記が書紀より先に成立したのは変で、奈良朝後期万葉巻二十成立以後とする。成立についての以前よりの疑問をこの考では仮名遣いに求められたが、氏は他の面よりの考察も試みており、今後の発展を見守りたい。既成概念への反省としてみられるが、また専門国語学者との共同研究の必要が痛感される。筏勲氏『上代日本

文学論集』（基礎的研究篇・古事記・歌経標式偽書論と万葉集）（民間大学刊行会、一月）は、古事記などに対する疑いをのべたものである。三吉陽氏「万葉集における『ト』の混乱」（愛媛国文研究十号、三月）は記紀より見えている甲乙の混乱のうちの「ト」を万葉集について整理し、その理由を探られる。

古事記学会は倉野憲司博士を会長として昭和二十六年発足したが、その年報二（一月）には同博士「宣長の古事記訓法の批判―主として第三人称の代名詞について―」があり（サブタイトルの此、是、茲、其、彼、夫の訓について宣長の訓法を批判改訓をされている）その他、小野田光雄氏「古事記の助字『爾』について」（古事記年報二、一月）、古賀精一氏「古事記における会話引用―白、奏、詔、告の用字法―」（同）、藤井信男氏「古事記の成立時期と用字法との関係―『師』の字について―」（同）、梅沢伊勢三氏「古事記及び日本書紀の字音仮名の性格」（同）、鴻巣隼雄氏「人麿をめぐる字音仮名と記紀歌謡との対比（同）があり別に西田長男氏「古事記の仏教的文体続篇（芸林六ノ一、一月）、福田良輔氏「倭建命は天皇か―古事記の用字法に即して―」（語文研究三号、十一月）、門前真一氏「上代における御の一用法―御立座而と御阿加良毗坐の訓」（山辺道創刊、五月）などがあり、鈴木氏によってふれられたところであるが、このように用字法に関する論考が多い。門前氏「古事記『為御寝坐也』の『み』と『ます』―三矢博士の学説の展開をめぐって―」（天理大学学報十八輯、十月）は前論の発展である。語彙については北西鶴太郎氏「『筑紫』攷」（文芸と思想十号、七月）、高木友之助氏「相撲原義私考」（中央大学文学部紀要二号、十二月）がある。前者はツクシの地名について在来の説のうち松田説（境とみる）に同じられ、後者は相撲の語義をセメアヒとする。日本書紀にもふれている。森田康之助氏「大日霊貴と天照大神―ひるの名称についての一考察―」（国学院雑誌、六月）もある。春日和男氏「下照姫の歌―歌語と提示性と―」（文学研究52、六月）はこの歌の末尾の「曾也」の訓法を検討「也」を置字とする。「国語国文、二月」の続考。西尾光雄氏「古事記の文章」（国語と国文学、五月）は会話と地の文では形容詞風の用字に相違あることを上巻により示し、訓法の再検討などを提唱される。「日本書紀の文章―神代紀を中心として―」（国語国文、五月）は小島憲之氏の「上代人の文（あや）」研究の一つをなすもの、神代紀の文章は他巻と異なった文体を有し、その助字用法は中国の俗語文の強い影響が考えられるとし、ここから草稿者の性格も明らかにされようとする。

万葉集の研究が数百年来、脈々とつづけられているのは一つの驚きであるが、昭和三十年前後の今日における成果は、その努力の集積である。『万葉集大成』として次々に刻まれている。前年にひきつづいて正宗敦夫氏の「総索引単語篇・諸訓説篇上下・漢字篇」（六月、九月）の再録があり、「訓詁篇下」（二月）、「言語篇」（五月）がある。前者には沢瀉久孝博士「訓詁の方法」以下井手至・石井庄司・松田好夫・伊藤博・福田良輔・大浜厳比古・武智雅一・吉井巌・上原浩一・蜂谷宣朗・阪倉篤義以上十氏の巻十より二十までの問題の歌についての訓詁が示されている。後者は「万葉集文字論序説」（山田俊雄氏）、「万葉集における語詞の構成」（阪倉篤義氏）、「万葉時代の代名詞」（菊沢季生氏）、「動詞・形容詞」（佐伯梅友博士）、「助動詞」（浜田敦氏）、「万葉集の助詞」（林大氏）、「文の

構成」（佐伯梅友博士）、「万葉集における待遇表現」（佐藤喜代治氏）、「万葉集の敬語」（金田一京助博士）、「東歌の語法」（福田良輔氏）、「万葉人の言語生活」（池上禎造氏）、「万葉時代の音韻」（大野晋氏）、「枕詞と序詞」（境田四郎氏）が収載されている。最新の成果に基づく概説が多いが、創見に充ち筆者の独自の立場による論もあり、すぐれた一個の研究論文と見なされるものもある。なお「特殊研究篇」（三月）には神田秀夫氏「万葉集の用字の一側面」がある。論文に目を転ずるに、訓詁、解釈に多くの成果をみるが、おおむね微視的であり、この学の今日の姿を思わせる。「万葉」（十七号解釈特輯、十月）には次の諸論がある。武田祐吉博士「いまのをつづ考」（今の時代の意とする）、正宗敦夫氏「『足荘厳』と『檀越』」（前者はアシヨソハクモ又はアシカザラクモ、後者はダナヲチと訓む）、阪倉篤義氏「『宇多我多毛』劄記」（そこにのべられている事実に対して文体の感想や批判を表明する語）、吉永登氏「むささびは木ぬれ求むと」（この歌についての試解）、森本治吉氏「黒人の『旅にして』の歌の訓釈」（赤の曾保船は写実語で奥楞所見と訓ず）、沢瀉久孝博士「しひがたりといふ」（結句イフと訓ずる）、伊丹末雄氏「『神之諸伏』の訓」（カミノマニマニと訓ず）、春日政治博士「『毛無乃岳』の訓」（アイヌ語「林」のケナシと訓む）、小島憲之氏「叩々ものをおもへば」（前者ネモコロニ再説、床うち払ひの試解）、伊藤博氏「考えられる訓詁一つ」（巻十 1982 の我恋を「独恋」の誤字とする）、井手至氏「恋故にこそ」（巻十一 2400 の第五句をコヒユエニコソと訓ず）、山田孝雄博士「百人一首の柿本人丸の歌」（第四句をナガナガシ夜を古格に合ふので可とす）、山崎馨氏「地庭不落の訓について」（第四句ツチニハフラジの新訓）、真鍋次郎氏「角のふくれ」（「ウマシモノイヅクアカネカーイヅクカアカヌー尺度ラガワケノフクレニシグヒアヒニケム」尺度は奴メのぶ男にしぐひ、あったのだろうかと解する）、春日和男氏「碓氷の坂を越えしだに」（越え時（シダ）に）、大坪併治氏「うつらうつら考」（目ノアタリ明カニの解を古点本の例より証す）。このほか訓法については、倉野憲司博士「『奈何可』の訓について」（文芸と思想十号、七月）、菊沢季生氏「万葉集巻十 1817 の歌について」。（宮城学院女子大学研究論文集7、六月）、菊沢季生氏「万葉集巻八 1546 の歌の訓み方」（文芸集研究19集、二月）、木下正俊氏「『水鳥二四毛有哉』其他」（万葉十四号、一月）、石井庄司氏「『吾己曾座』（巻一ノ一）の訓について」（万葉研究第七号、五月）、鶴久氏「『天霧之』の訓について」（語文研究第二号、五月）、津之地直一氏「借訓か実辞か―『垣廬鳴』の『鳴』をめぐって―」（国文学四号、六月）賀古明氏「『変無乏』訓疑」（上代文学五号）があり、解釈には吉川貫一氏「『猪名野は見せつ』『名寸隅の船瀬』考」（国文論叢四号、十一月）、関守次男氏「『よどの継橋心ゆも』の歌の解釈」（山口大学文学会誌六ノ二、十二月）、久曾神昇氏「万葉集『打出而見者』について」（国語国文学報四集、三月）、木下正俊氏「『阿加古比須奈牟』私按」（万葉十六号、七月）、大浜厳比古氏「『妹とありし時はあれども』（万葉十五号、一月）などが見られる。このほか巻四・四八四の訓詁をめぐって佐伯梅友博士（「日本古典全書」附録、五月）と大野晋氏（万葉集大成月報十一月）に論があった。また、三猪末松氏「万葉集の『丹生のまそほ』と『宇陀のまは

に』新考―万葉辰砂考―」（国語と国文学、十二月）、松田好夫氏「万葉集『可家能水奈刀』考」（国語と国文学、五月）、木田義彦氏「万葉集『宇敝可多山』考」（万葉十四号、一月）、武智雅一氏「『伊予の高嶺』私考」（万葉十六号、七月）のような地名考証もあった。語意では境田四郎氏「万葉集の『ヤド』と『ヤドリ』」（女子大文学、国文篇第七号、三月）があり、ヤドは「家のあるところ」「ヤドリ」は「屋取る」が本義で仮名遣よりも語源的にも区別があったが、後に混用されるようになったとする。小島憲之氏「万葉語『ハタ』の周辺」（万葉十六号、七月）、春日政治博士「『取与呂布』私考」（西南大学文学論集一ノ一）佐伯梅友博士「万葉語研究―『新室のこどき』『生ひざりし草』―」（万葉研究八号、五月）は鈴木氏のふれられたところであり、また武田祐吉博士「豊の考」（文学研究十二号、十二月）は上代における「豊」が形容詞的用法を持ちながら他語と異ってその形態を得ないで終ったことを論ずる。江湖山恒明氏「万葉集『はだれ』考」（お茶水国文3、二月）、藤森朋夫氏「万葉集『玉の緒ばかり』考」（万葉研究8、五月）、武田祐吉博士「あまのひつぎ考」（万葉十四号、一月）がある。この他語法関係では江湖山恒明氏「『やすいしなさぬ』の解釈をめぐって」（お茶水女子大国文三号、二月）と「『やすいしなさぬ』の解釈をめぐっての補い」（同四号、七月）は「なさぬ」の解の諸説のうち佐伯博士説（寝＋使役とする）の再主張とその補説。武田祐吉博士「副詞『もとな』について」（国語研究三号、七月）は従来の山田博士説「よしないこと」に「切実に」の意を加え、もと（根本）な（感動の助詞）と考えようとされる。同じく丸山嘉信氏「『もとな』の用法」（徳島大学学芸紀要五巻）もある。橋本四郎氏「上代の形容詞語尾ジについて」（万葉十五号、四月）は「我じく」「鴨じ」に「時じく」などのジの否定の意を含ませようとする新説。石井文夫氏「潮みてば入りぬる磯の草なれや見らく少なく恋ふらくの多き」（未定稿創刊号、五月）は「已然形＋や……連体形」にはさみ込みをもった感嘆文と見てよいものがあるの論などがあった。以上のような伝統的な研究方法のほかに新しい見地より万葉集を見ようとする傾向も見られる。亀井孝氏が「埋もれた言語と埋もれた訓詁」（万葉十七号、十月）で中世以前の古い訓詁の中にとり用いるべきものがあることを巻初巻二の歌を証として論じられたのは傾聴すべきであり、旧態依然たる方法に新しく息吹を加えたものである。阪倉篤義氏「万葉語彙の一面」（国語国文、五月）は、事態の概念を表わす接辞サ・カ・タ・マは抒情詩の用語として上代歌謡の語詞の構成にあずかりえたものであるとし、万葉語の限界と平安時代以後散文資料との平板的な比較によって変遷を説くことの危険を説かれている。前記「万葉集に於ける語詞の構成」（万葉集大成言語篇）は本稿の先行論文で好論文である。都竹通年雄氏「万葉集の民謡と方言」（国語研究三号、七月）には問題の多い東歌について方言史という新見地より音韻、語法、語彙に亘って従来の成果をもととして概説したもので、現在における未開拓の分野たる、文献による諸方言の歴史的研究に鍬を入れようとされた注目すべき論。時代によっては文献が少い為に困難が多かろうが成果が期待される。なお蜂矢宣朗氏の編になる「万葉集読添訓索引―助動詞の部」（山辺道創刊号、五月）「同助詞の部（上）」（万葉十六号、七月）（助詞の部続は万葉十八号、三十一年一月）は万葉

集に基づく新分野へのスプリングボールドとなろう、とわたくしには思われる。目録ではあるが高橋辰久・徳武清助両氏による「万葉集研究文献目録（下）―雑誌論文―（文学研究7、二月）」（昭和二十四年度より二八年度までを収む）や他に「万葉関係雑誌論文目録（二十九年七月～十二月）」（万葉十四号、一月）、「同三十年一月～九月）」（万葉十七号、十月）、「万葉関係著書目録（昭和二十九年下半期）」（万葉十六号、七月）があり便利である。

上代の一般にわたるものとしては森重敏氏「代名詞『し』について」（万葉十六号、七月）がある。古語「し」が物主代名詞から人称代名詞として転用せられたことを論じ類似語「い・おれ・それ」等にも論及。氏の鋭意な論を進められる。原田芳起氏「上代日本語動詞の時について通時論的な一二の問題」（樟蔭文学七号十月）は時の助動詞タリとリ、ツとヌ、キとケリの相違を中古の例も用い、アスペクト（態）という点より認めている。能勢頼賢氏「上代敬語雑考」（学苑、十一月）は古訓古事記により罪人には敬語のないことを論じ、称呼にそう「命」の敬語としての性格をのべる。津之地直一氏「上代国語に於ける尊敬・謙譲の表現―万葉集を中心に―」（愛知大学文学論叢11輯、十月）は万葉集を中心とし、上代の仮名書の諸資料も援用し敬語の総合整理された労作。土橋寛氏「枕詞の概念と種類」（立命館文学124号、九月）は枕詞の本質や起源を考える基礎として、用法の固定性・社会性・意味の非実質性・語法の詠歎性を指摘し、更に枕詞の分類を試みた。同氏「枕詞の源流」の前提論文であり清新な観点による有益な考察である。犬塚旦氏「『あそぶ』の古義」（国文学十五号、十二月）は「あそぶ」が上代は管絃舞楽、漁猟の意で中古には音楽をさすようになったと説く。上代に詳しい。なお山田英雄氏「漢字の伝来」（解釈と鑑賞、四月）の概説もある。

中古

この期では興味ある論争がいくつかあった。その一つは伝聞推定のナリに関するものである。この問題は遠藤嘉基博士によって口火が点ぜられた（国語国文、二月「新講和泉式部物語(七)」）。博士は、終止形接続のナリを断定と情意の綜合的表現と見ようとされ、松尾博士以来の伝聞推定説を否定されて、かつての詠嘆説を再考の要ありとされた。ついで同博士は万葉集の例についても論ぜられ、「らし」との共存という点よりも前説が当てはまるとされ（万葉研究、五月「いわゆる伝聞推定の『なり』について」）、更に増補訂正をも加えて再説されもした（国語国文、七月「新講和泉式部物語(九)」）。竹岡正夫氏も否定説を掲げ（「いわゆる伝聞推定の助動詞ナリの本義」国語国文、七月）、あなたの事をこなたより見聞ていう語とする、江戸時代の学者の所説を正しいとされ、原田芳起氏もまた（伝聞推定の「なり」国語国文、七月）否定説に同じられ、対象を離れた位置においてこれを状態としての表現とする宣長説を可とされた。一方、木之下正雄氏「指定のナリと推定のナリとの相違点」（国語国文七月）は連体形に付くナリと終止形に付くナリとは意味・文法上の機能・アクセントより大きな相違があることを源氏物語の用例より確認され、小松登美氏も（「未定稿」創刊号、二号）両ナリの最盛期たる平安時代の主な仮名文学により、終止ナリの用法を検

討され、連体ナリとの相違を示し（「指定のナリと伝聞のナリ」同創刊、五月）、終止ナリに見られる共通性から、用例を豊富に蒐集して、話し手の「聞く」立場をあらわすことより松尾説を再確認し補正された（「終止ナリ私見」同二号、十一月）。更に春日和男氏によって（「いはゆる伝聞推定の助動詞『なり』の原形について」国語学23輯、十二月）、成立的にも伝聞推定のナリは指定のナリと全く別系統のことばであることを万葉集の借訓仮名より実証され、終止形承接の理由にふれ、「めり」との関係において聴覚的に動作を把える形を「なり」とし、原形は「ねあり」又は「なあり」（やや想像が強いが）形とみられるに至って、この論争も一応の落着を見せたかに見える。小松登美氏には、外に「助動詞めりの起源について」（跡見学園紀要二、十月）がある。原形を「見あり」とするが音節結合よりみてまず動かないものであろう。同意見はすでは大野晋氏「万葉集時代の音韻」（万葉集大成六）にもあった。小松氏は平安時代の九世紀頃の用例を検討、推量の以前に「私は今見ている」の意であったことを推定、「見・あり」説の裏付けとした。

遠藤博士による「新講和泉式部物語」（国語国文）は昨年につづき「さきざき」と「らむ」についてそれを未来の意に考えられた説を一月号に掲載、三宅清氏（「さきざきの意義」）、高橋貞一氏（「質疑」）、同博士（「新講和泉式部物語(八)―高橋・三宅氏に答える―」）の論争が四月号に行われた。浜千代清氏「さきざき見給ふらん」の解釈（国語研究24九月）もあった。前述の二月号・七月号の「ナリ」論とあわせて注目すべく、三十年の動向に一つの傾向を作ったもの。なおこの講座は十（「解釈とは何か」「あはれに」八月）、十一（「まことに」十月）とつづけられ、同博士の表現意識の問題が追求されている。今後どのような問題が提出されるか期待される。

ついで助詞「ばかり」論議も見られ、大いに解明された。湯沢幸吉郎氏「『ばかり』の活用語への付き方」（解釈一ノ二、六月）は平安朝においては連体形につく場合の「ノミ・ダケ」で、終止形につくのは「ホド・グライ」の意が原則であると説き、これにつづいて馬淵一夫氏「私の『ばかり論』について」（解釈一ノ四、八月）の接続の相違を体験の有無より考えられた論があり（蔵明五「ばかりの承接」の抄説）福島邦道氏「助詞ばかり鶏肋」（解釈一ノ六、十月）によって右両論の補説がされた。また助動詞「らむ」について最近の説を再検討する傾向があって、例の古今集の和歌がひきあいに出された。宮坂和江氏「しづ心なく花の散るらむ」（解釈一ノ五、九月）、宮田和一郎氏「しづ心なくの歌について」（解釈一ノ七、十一月）などで、「らむ」を詠嘆に考えて疑問のドウシテを補うことを否定された。なお、宮田氏「語法と解釈」（平安文学研究十七輯、六月）にも同様の論がある。これに対して佐伯梅友博士「『らむ』について」（未定稿二号、十一月）は再び現在推量とする説を強調された。

右の雑誌「解釈」は、この年五月西下経一博士によって創刊され、年内に八号（十二月、以上一巻）まで刊行されたもの。作品の解釈の外、語句解釈・解釈文法などの小論を多く収めている。創刊号（五月）には「解釈について」（西尾実氏）、「なにがしさぶらふ」（佐伯梅友博士）「『給ふ』の特殊な用法」（堀内武雄氏）があり、二号（六月）は「徒然草の解釈異見」（慶野正次氏）、三号（七月）「古

今集ところどころ(一)」（橘純一氏）、四号（八月）「源氏物語の『なつかし』（佐藤孝枝氏）「源氏物語の『ふればふ』（島田昌彦氏）、五号（九月）「流れに沿うて」（遠藤嘉基博士）、『清明』の訓読と解釈」（井上豊氏）、「紫式部日記ノートより」（石村正二氏）、「さしも草考」（志村士郎氏）「『なりぬれば』について」（渡辺仁作氏）、六号（十月）「古今集の懸詞の意義」（徳住篤氏）、「大鳥の羽の霜」（原田芳起氏）、「和泉式部の和歌『人の身も恋に……』」（為貞節穂氏）、七号（十一月）「波のゆくへ」（内田暁郎氏）、「修飾格に於ける解釈上の問題」（大久間喜一郎氏）、八号（十二月）「『なほあらじに』の解釈」（宮田和一郎氏）「『枯れぬと思へば』の見方」（鈴木淳一氏）、「枕草子に於ける『をかし』」（佐藤喜三郎氏）「古事記に於ける音韻結合の一法則」（国井桂二氏）が収められた。この中で清水重道氏「誦ず」（三号、七月）は先年刊行された。中田祝夫氏『古点本の国語学的研究総論篇』の所説と全く符合する。

個々の作品についての論考には次のものがある。寺阪美千代氏「竹取物語の文体」（樟蔭文学七号、十月）は文体の立場により従来問題とされていた成立期を推定されたが問題のあるこの物語本文の無批判な使用の上での推論は危険であろう。宮坂和江氏「源氏物語の文章における歌挿入の手法について」（実践女子大学紀要第三集、二月）は散文と歌とのつづき具合とを統計的に論じたもの。児玉玲子氏「源氏物語の文章―歌と地の文及び詞と文との関係を中心として―」（京都女子大国文二号、七月）は和歌と散文とのつづき方、その両者の融合の現象を数類型に分けて考察している。また中川浩文氏には「源氏物語の助詞接続計数(三)」（国文学論叢五、十一月）と「源氏物語の『おほかり』の語法―対話、地の文を中心に―」（京都女子大国文二号、七月）がある。前者は先年に引きつづいて助詞の用例整理をされたもので、後者は源氏物語を中心に竹取・蜻蛉・うつほ物語には「おほかり」「おほかれ」が主で、「おほし」「おほけれ」が殆んどないとする。中岡由行氏「敬語の接尾語『聞ゆ』について」（愛媛国文研究室四号、三月）は源氏物語の用例により、この語が皇胤、またはそれに準ずるものに対して直接叙述のなされている場合に用いられるとする。馬淵一夫氏「あな」（国語研究23、六月）は帚木の「あなくらし」について、あな＋形容詞（語幹）より考えて「くるし」であると説き、また「あなかま」は「かまし」の語幹と見る。犬塚旦氏「清ら・清げ私見」（芸林六ノ四号、八月）は表題の語について源氏物語を中心に検討され、ともに華麗・上品な内容をさすが、前者は親近的「なまめかし」的で後者は非親近的「うるはし」的であるとする。鈴木富美氏「源氏物語『桐壺』の巻を扱って」（国語研究23、六月）は冒頭の解釈その他についての意見・感想。井口ふさ氏「『かまつか』考」（愛媛国文研究室四号、三月）は枕草子の中のこの花を「けいとう」の花と見る。八木毅氏「枕草子『荒海のかた』小考」（明日路八ノ一、一月）宮城文雄氏「心深しの語義について」（徳島大学学芸紀要四巻、二月）もある。土岐武治氏には「堤中納言物語語彙考証」（立命館文学一一六号、一月）があり、春日和男氏「『桜花をる少将』における語彙」（文学研究五十一号、三月）は「小弓」「おほ上」などの語より先行文学特に源氏物語の影響を明らめる。山田俊雄氏「倭漢朗詠集の詩句の用字」（成城文芸五号）は鈴木氏のふれられたところであり、中

条芳子氏「倭漢朗詠集における対句の読み」（国語学20輯、三月）は主として朗詠集の上の句の読みは編集当時は終止形であったことを枕草子と訓読文の援用により説く。該資料は古い訓点もあり、更に多くの資料によりその妥当性と限界とを明らめたい。この外では、本位田重美氏「八代集の撰述態度―詞書の記載法を中心として―」（日本文芸研究七ノ三、十月）は詞書における「き」と「けり」との厳密な使い分けより各集の撰述の立場を論ぜられた手堅い論考があり、秋本吉郎氏「平安朝前期の特徴的歌語について―『かずかずに』『いへばえに』考」（大阪経大論集十四号九月）はともに漢字面の訓読に起因する特有歌語であると説く。

形容詞のク活用とシク活用所属語に意味上の相違を考えることは先学によって注意されたことであるが、記紀万葉と源氏、古今より実証しようとされた山本俊英氏「形容詞ク活用シク活用の意味上の相違について」（国語学23輯、十二月）は例外の多いのが気になるが、紫式部日記においても石井文夫氏「形容詞の意味と活用」（未定稿二号、十一月）が報ぜられており、その傾向は認められよう。青島徹氏「疑問副詞の省略」（国語と国文学、一月）は平安時代の散・韻文中より疑問副詞の省略を考えうる例について考察された注目すべき説である。現代語の疑問語の省略よりすれば古典においてもその可能性は考えられるところであるが、従来語形上の根拠がないので放置されたこの考に形態・意味よりの要素を設定して論考されたもので、疑問助詞の場合などへの論及とともに今後の発展がのぞまれる。又伊藤慎吾氏「助動詞ッ、ヌの特殊な用例の研究―有り、侍り、給ふなどに接続する用例について―」（滋賀大学紀要四月）もある。敬語では樋田定樹氏「敬語の場面的転成とその変遷―所謂『被支配待遇』表現について―」（国語国文、六月）と尾崎知光氏「所謂自敬表現について」（名古屋大学文学部研究論集X、三月）がある。前者は「つかはす」「のたまふ」「申す」「まうでく」「まかる」「仕る」「承る」など素材間の関係表現を示す敬語が話手と聞手の人物との関係や更に聞手に対する或る態度の表現となる用法を中古より中世の例に求めた好論。後者は天皇などに多いこの表現は、本質的には話法の混淆による現象であり、本来は尊者の動作を語り伝え言い述べる者の立場からの敬意が介入したものかとする。原田芳起氏「おはさふ・おはさうずの意味構造」（語文一六輯、十二月）、風間力三氏「『ゐる』の意味史」（甲南大学文学会論集二）には鈴木氏の言及がある。大久間喜一郎氏「相反意義成立の基盤」（文学研究十二号、十二月）は多義一語で相反する意味を有する語を史的に論じた新見である。中古以後の例によっている。

「平安文学研究」第十七輯（六月）には、語法語彙の考証が見られる。宮田和一郎氏「禁止放任の口語」石川徹氏「平安文学語彙考証」犬塚旦氏「『見ゆ』の用法について」田中重太郎氏「枕草子『ことぐ〳〵なるもの』考」原田芳起氏「蜻蛉日記私註(一)」青島徹氏「紫式部日記私註」大森正雄氏「やひろうち考」鈴木弘道氏「更級日記『こめすう』の語義と『いくちたび』の歌についての疑問」があり、上村悦子氏「学習院本かげろふの日記」の鱗刻がはじまった。

訓点語に関する論考は昨年に引きつづき今年も多かった。訓点語学会は機関誌「訓点語と訓点資料」四輯（吉沢義則博士追悼号五月）、五輯（十月）を発行した。資料紹介は後述の「知恩院蔵大

唐三蔵玄奘法師表啓」（四輯）（築島裕氏）と「古文孝経序の訓読文四種」（五輯）（小林芳規）で、他は論述文が多かった。春日政治博士「古訓雑記」（四輯）は聖語蔵の資料を中心に平安初期にォをヲと誤った一例のあることや、正暦点の古訓点の傍訓の珍しい語や、今日の俗語・方言が古訓に見えることを論じられた味のある文。大坪併治氏「おぐらき考」（四輯）は地蔵十輪経の平安初期点にヲをォと誤った二例について延喜九年のキ・イ混用例と共に論じられた。曾田文雄氏「寛弘五年のォヲ混一資料」（国語国文、二月）と共に注目すべき論である。なお慎重を期して同種例の発見に俟ちたい。第四輯には追悼号に因んで「吉沢博士訓点語関係論文目録」を掲げ、又遠藤博士の追悼文もあった。資料の調査報告に春日政治博士「聖語蔵本菩薩善戒経点」（国語国文、十一月）、大坪併治氏「石山寺本妙法蓮華経玄賛巻三の訓点」（訓点語と訓点資料五輯、十月）、同「国宝南海寄帰内法伝の訓点」（島根大学論集第五号、二月）がある。それぞれ平安初期・中期・院政期の点本についての概説であるが、多くの新資料を提供されている。初期の段階にあるこの分野では解読文の公表と共により多くのこの種の発表がのぞまれる。後世のものであるが特異な訓点語彙をもつ資料を整理されたものに平井秀文氏「陽明文庫本遊仙窟訓読語彙」（福岡学芸大学紀要五号、十二月）がある。「訳文稿」につぐ苦心作。木下正俊氏「南海寄帰内法伝に見える宝幢院点と西墓点との関係考証」（訓点語と訓点資料五輯、十月）は現京都博物館蔵の内法伝巻第四の中に従来報ぜられた宝幢院点の外に西墓点流の加点が見られることを証された。ほかに春日政治博士『万葉集と古訓点』（万葉集大成20、八月）があり、中田祝夫氏「古本点図集二種」（プリント九月）がある。

春日和男氏「『也』字の訓について―『ぞ』と『なり』の消長―」（国語国文、二月）は古く不読であった「也」にナリの定訓が生ずる姿を、その消長を背景に論じられた。訓点史上の好論文である。小林芳規「訓点語法史における副助詞『ら』」（国語と国文学、十一月）は接尾辞と異なった副助詞の「ら」が漢文直訳語として平安中期以降に生じ、後の混淆文にも影響を与えたことを論じたもの。三橋孝一氏「ク形式複叙法―いはく『』といふ―の一考察」（国語三ノ四、七月）は漢文訓読に起因する「イハク……トイフ」の記述法を中心にその用例を中古の和文、中世の和漢混淆文に亘って詳しく調査されたもの。竹治貞夫氏「所字の用法」（徳島大学学芸紀要五巻は漢文における多義な「所」字の用例を中国語の用例より検されたもので、漢文訓読史の好参考となる。

同一資料について二氏の解読文があったのは興味深い。築島裕氏「知恩院蔵大唐三蔵玄奘法師表啓古点」（訓点語と訓点資料四輯、五月）と遠藤嘉基博士「知恩院蔵大唐三蔵玄奘法師表啓古点について」（国語国文、十一月）の御労作で共に吉沢博士の追悼号に因んで故博士のかつて解説された資料（『国語国文の研究所』所収）の再解読である。両者を比較してみると資料取扱いの重要さと、この学のむずかしさを知る。解読文の表記法の一致していることは利用者に便利であり、築島氏のは漢字・語彙索引が付いている。この種の資料は和文献などの書写翻刻と異なって、訓読文作成自体、作者の解釈が入るものであるから、担当者によって小異のあるは

止むを得ない。万葉集の訓法に多くを存するがごとくで、第四、第五の「表啓古点」の訓読文が出されることによって一層この学の発展と利用度が高められるであろう。築島裕氏「古今集仮名序と漢文訓読」（東大人文科学科紀要7、七月）は古今集仮名序に訓点語彙・語法の見られることを実証、漢文の影響が思想上のみでないことを裏付け、更に仮名文学中、訓点語の影響に純漢文からと変体漢文からの二類あり、仮名序は前者であり、かつて論及された土佐日記は後者であるとされ、氏の中古訓点語研究の一連の労作一つである。また奥村恒哉氏「古今集仮名序諸本と訓点語」（訓点語と訓点資料四輯、五月）は古今集の諸本の（主として証本対元永本）先後関係を本文中の訓点語の有無によって判明させようとされたもので、新しい試みである。

中田祝夫氏「かなの論くさぐさ」（国語学20輯、三月）の諸論中、平安時代のかたかなに社会共通体と訓点本記入体の二種類があったとする論は国語史を論ずるに今後とも留意すべき発言であろう。築島裕氏「辞書史と片仮名」（国語研究四）は片仮名が個人の備忘より社会共通文字に至る前に音義や辞書の和訓として用いられた過程があり、それは図書寮本類聚名義抄所引の真興の資料などにより十世紀終頃であろうとされる。「言語生活」七月には、阪倉篤義氏「平がな用法の歴史」、山田俊雄氏「過去におけるカタカナ用法の諸相」があり、ともども好論である。

「解釈と鑑賞」六月号は古典の修辞法を特集し、本稿関係論考も収めている。築島裕氏「中古漢文訓読文の修辞法」は原漢文に拘束された窮屈な言語表現たる訓読文には修辞法は行われにくいが原漢文が文芸作品であるものには価値は乏しいながらみられること、古伝説にいう豊富な修辞の古訓は実在なものでないことを論じ、訓読文にも異種のあることを示された。（「中古漢文訓読文の文構造」国語と国文学31の9を補うべきもの）この他真下三郎氏「女性語の修辞」、山田忠雄氏「漢字かなまじり文」、宮坂和江氏「会話文と地の文」、西尾光一氏「候文」、中村幸彦氏「擬古文」菊沢季生氏「武士詞」、小沢正夫氏「歌語」、根来司氏「懸詞」、関根慶子氏「詞書・歌の註」、大久保正氏「枕詞・序詞―回顧と展望―」、江湖山恒明氏「文の省略」、宇野義方氏「倒置法」、武田元治氏「係結び―その修辞的意義について―」などを収める。啓蒙的概説的であるが新見をも含むものもあり、もう少し紙数が加せられたらと惜しまれるものもある。大野晋氏「日本古典文法㈠―その一・係り結び―」（解釈と鑑賞、十二月）は、つづきものの啓蒙文で、係り結びの第一回。氏独自の見解もある。

中　世（鎌倉時代まで）

この期に対する関心は次第に高まりつつある。「文学」（四月）では「今昔物語集」を、「解釈と鑑賞」（十一月）では「中世と文学」を特集した。直接語史の問題に触れたものはないが、無関心ではおれまい。前者には「今昔物語集関係研究文献目録ノート」（川口久雄氏）の詳細な目録があり、「今昔物語集と古本説話集について」（同氏）があった。「梅沢本古本説話集」は新発見の資料で鎌倉中期書写本で貴重古典籍刊行会（第一期第五回配本、四月）より複製され（別に岩波文庫本（四月、川口久雄氏校訂）に翻刻）語学

の面からも中世語研究の好資料を提供している。同会では『楊守敬旧蔵本将門記』（第一期第四回配本、三月）の待望の資料をも複製し、山田忠雄氏の有益な解説がある。就中、抄本・真福寺本との関係は重要な論考である。この年宗性上人研究会（奈良市東大寺塔中上之坊内）が発足、『宗性上人年譜』（第一集、十二月）の配布があった。上人の遺著は中世語研究に看過出来ないものと信ずる。また『南都仏教2号』（五月）もあった。別に中世文学会（早稲田大学教育学部研究室内）設立の下地が出来たものこの年後半期である。この会は国語学の有志をも含めると聞く。右のような周辺の動きにも拘わらず、この期の論考の少なかったのは寂しい。しかし各氏興味深い成果を公表されている。

アクセントならびに音韻について。馬淵和夫氏「いろはうたのアクセント」（国語学23輯、十二月）は、承暦の金光明最勝王経音義を最古として中近世の新資料も提出、いろはうた所載のアクセントには二種あり、現存資料のは節奏であって、アクセントの反映でないとされ従来の説の不備を補正された。秋永一枝氏「古代のアクセント註記からみた古今和歌集解釈の諸問題」（国文学研究十二輯、八月）は鎌倉時代の伝本八種に附せられたアクセントより従来解釈上問題のあった諸語についてそのアクセントを付けた人の態度を探った手堅い論である。潟岡孝昭氏「鎌倉初期のンとムー親鸞聖人の場合を中心に一」（徳島大学紀要四、二月）は真筆の専修寺蔵「唯信鈔文意」および「教行信証」「御消息」により、鎌倉初期のンとムの混用を論ず。他の資料との関連論及もほしい。

文法には桜井光昭氏「回想の助動詞の用法」（国語学23輯、十二月）があった。今昔物語の本朝部を主として「き」は体験の、「けり」は観念の回想とする仮説に基づき、作者と同年代の人々に「き」が集中していることをその根拠として論じた。定に一つの傍証を与えるかと思われるがなお考慮の余地があろう。島田勇雄氏「ごとしの意味について」（神戸大学文学会研究七号、三月）は、意味の分類、変遷など参考とされる点が多い。本位田重美氏「宇治拾遺物語における尊称の『が』について」（日本文芸研究、十二月）は従前の論を深めて行ったもの。

山田俊雄氏「色葉字類抄畳字門の訓読の語の性質—古辞書研究の意義にふれて—」（成城文芸三号、四月）は三巻本色葉字類抄畳字門所属語について漢文訓読系統が主力を占めることより、類聚名義抄との比較にもよりこの字書が日常語を集めたとする従来の説を批判され、併せて古辞書は書誌学的考察の外に国語史の面、実践的意義よりも考えられるべきであるとされる傾聴すべき説を出された。川端善明氏「『説話物語集』の文体—言語態度と表現意図と—」（国語国文、九月）は中世の諸説話を恰好な資料なるが故に、それを媒介として新しい文体論を構想だてた。批判さるべき点があるが今後発展がのぞまれる。

「言語生活」十二月には、宝月圭吾氏「候文の歴史」、岩淵悦太郎氏「書簡文の歴史覚書」がある。

資料紹介に近藤喜博氏「熱田本日本書紀私背和歌」（国学院雑誌）、日野瑞氏「新出の親鸞聖人真筆の太子奉讃に因みて」（大谷学報）がある。小川貫弌氏「阪東本『教行信証』行巻の筆跡」（竜谷史壇三九号）は国語史料として重視された

「教行信証」の阪東本から始めて親鸞自筆諸本との検討に及ぶ。神田秀夫氏「『附音増広古註家永』と『家永和歌』の古写本とに就て」（上野図書館紀要第二冊、六月）は上野図書館蔵の紹介である。

〔付記〕稿半ばにして病臥の身となったため、成稿には福島邦道氏と築島裕氏の御力添えがあった。記して両氏の厚意に深謝し奉る。（昭和三十一年大暑、上野の森を望む病室にて一交了）

―東京文理科大学研究生―

室町期以降

福島邦道

中世（室町時代以降）

単行本では、東京大学文章語研究会の人々の手になる、時枝誠記博士編「徒然草総索引」（至文堂、八月）がまずあげられる。国語研究者の必携の書として広く利用されるべきものである。次に学界多年の懐望であった土井忠生博士「ロドリゲス日本大文典」（三省堂、三月）の訳業が注記まで添えて完成された。今まで部分的な引用やランドレスの小文典ぐらいしか手近に見られなかった私などには驚きであり、中世語研究の上で期を画するものである。欲を言えば原葡文の併載もと思われることである。岡本良知氏・今泉忠義氏の書評（国語学、二十三輯、十二月）がある。

音韻関係にはいくつかの注目すべき論考があった。森田武氏「吉利支丹資料のローマ字綴―日葡辞書、ロドリゲス大文典を中心として―」（国語学、二十輯、三月）は、その表記で問題のあるものについての精細な考察であり、この種の資料を取扱うにあたって益するところが多い。阪田雪子氏「天草本伊曾保物語におけるオ段拗長音のローマ字綴をめぐって」（日本文学、五号、六月）にも、同様なことがこまかく吟味してある。たゞ表記と音韻との関係については配慮のほしいところもあろう。浜田敦氏「語末の促音」（国語国文、一月）は、入声tの音価などをめぐっての立論で、中国朝鮮の資料が援用してある。これはかつて岩淵悦太郎氏などにより論じられ、連声の問題などとからんでいるが、爾後の研究に寄与するところが大きい。亀井孝氏「室町時代末期の/ɸ/に関するおぼえがき」（国語研究、三号、七月）は、当時の音韻体系にも関することで、「あきま」「すきま」の考えを論じ、ɸの音価を服部四郎博士がmellowであるとするのに対してはcontinuantであるとするもので、今の私など亀井説にひかれるが、また傍証のうかゞいたい点もある。奥村三男氏「撥音ンの性格―表記と音価の問題―」（国語学、二十三輯、十二月）は、奥村氏のくわしい唐音資料にもとづきその音価が中近世にかけて〔ɲ〕から〔n〕になったことの詳論である。語末のlaxな〔N〕や鼻母音との関係などにも及んでほしかった。浜田敦氏「音韻体系に於ける長音の位置―特にオ段長音の問題―」（国語学、二十二輯、九月）はオ段長音の開合について氏独自の立場からの音韻論で、橋本進吉博士の定説とは異るところがある。これは国語史の一大問題で国内資料などを考え合わせる時、論及していただきたい疑点もあろう。有坂秀世博士「上代音韻攷」（三省堂、七月）には、「書史会要」についての記述があるが、同博士による言語研究十六号の方が新しい。

飯田利行博士『日本に残存せる中国近世音の研究』（駒沢大学内刊行会、十一月）は、この期の唐音資料を博捜しての労作であり、よるべきものも数多いが、音韻についての考えにはいかがと思われるふしぶしもあろう。

文法関係には手堅いものが見られた。清瀬良一氏「天草本平家物語の接続表現―「さらば」などの場合について」（広島大学文学部紀要、八号、十月）は、「さらば」の類の呼応や発話的な言い方を新しい角度から調べあげたもので、接続詞の重要性と相まって本物語の性格などを知る上にも示唆を与える。大塚光信氏「バ四・マ四の音便形」（国語国文、三月）は、前年の浜田敦氏、前田勇氏の説に対し、別の資料などより両説を止揚したもので聴くべきことが多い。土井忠生博士「ロドリゲス日本文典に於ける形式名詞の取扱」（国語国文、十一月）は、キリシタンの日本語研究の構造特質にかかわるものである。山本和子氏「室町時代の敬語『ござる』『おじゃる』『おりゃる』について」（日本文学、四号、一月）は、虎明本能狂言による待遇関係の精査である。一部分亀井氏の旧論を参看されてはと思われるところもある。間瀬惇氏「狂言の詞章について」（国文学、四号、六月）もあった。橋本四郎氏「ベシ・マジの接続面の混乱」（国語学、二十二輯、九月）は、中世におけるベシ・マジの接続の様相と因由とを探った興味ある考察である。マジを未然形接続とするのに宇治拾遺一本の一例では不安ではあるまいか。久しく入手難の、湯沢幸吉郎氏『室町時代の言語研究』が、『室町時代言語の研究』（風間書房、八月）として再刊された。

語彙関係では、大阪市立大学研究室の共同研究「国語副詞の史的研究」㈠㈡㈢がある。井手至氏「『せめて』について」浜田敦氏「あながちに」（人文研究、六の五、五月）塚原鉄雄氏「『なかなか』の展開」（単行、九月）があり、それぞれ中世近世における意味の推移を豊富な用例から推論したもので、これら一連の研究テーマは高く買いたい。寿岳章子氏「形容詞の語彙的変遷―中古から中世へ―」（国語学、二十二輯、九月）は、抄物語彙と中古語との対比によるもので、抄物の新分野を開拓しようとするものである。渡辺三男氏「明末の日本紹介書『日本一鑑』について」（駒沢大学研究紀要、十三号、三月）の渡辺氏は既刊『日本考』の訳者で、日本一鑑の諸伝本の紹介、訳例などについての有益な解説である。たゞ氏が誤訳とされたものの中にはそうでないものも見うけられるので補訂を要しよう。浅野建二氏「閑吟集難歌考」（国語と国文学、二月）には、所々に国語学的知見が示され、重松紀彦氏「『しろうるり』の言語理論的研究」（愛媛国文研究、四号、三月）もあった。

資料ではキリシタン関係のものがいちじるしい。いつもながらの高羽五郎氏の精密な翻刻がまずあげられる。「ロザリオの経」（翻字篇）Ⅰ（九月）Ⅱ（十月）「コンテンツスムンヂ」（原文篇）Ⅰ（二月）がある。新しく東北の井上章氏による「天草本平家物語」（原文翻字対照）のあったことも特筆すべきことである。海老沢有道氏「ろざりよの観念」（スピリッアル修行第一冊）（ナツメ社、十二月）は、一部ではあるがはじめてのものである。氏の翻字法にはすこし読みづらいところもある。新村出博士「天理図書館蔵こんてむつす、むん地―書誌序説―」（ビブリア、三号、三月）は、この道の先達による従うべき解説であり、その出版が待たれる。

助野建太郎氏「耶蘇会版祈禱書の研究」（六浦論叢、四輯、七月）は、諸種のオラショが歴史的に概観されている。新井トシ氏「『精神修養の概要』その他」（ビブリア、五号、十月）があり、「きりしたん伝道特殊本目録第二編」（英文）（天理図書館、十月）は、伝道関係のものだが、キリシタン物の西の宝庫たることを示している。遠藤嘉基氏「抄物目録Ⅱ」（国語国文、一月）は寿岳章子氏の手になるもので、新紹介のものを多数ふくみその大成が切望される。古典文庫では、「和泉流狂言集第六冊」（四月）「同第七冊」（九月）「良基連歌論集」（三月）「室町時代物語二」（五月）があり、高乗勲氏「永和書写木太平記」（零本）「国語国文、九月）「永和書写本秋夜長物語」（国語国文、十月）は、ともに新発見になる最古の写本である。市古貞次氏「中世小説の研究」（東大出版会十二月）中の「中世小説年表稿」は、この関係からもとりあげておきたい。

近世

「江戸ことばの研究も思いなしか一段と盛になって来た」とは三十年秋の公開講演での中村通夫氏のことばであるが、近世語全般にまことに多彩であった。

音韻関係では、松村明氏「江戸語における連母音の音訛」（お茶の水女子大学紀要、七巻、七月）がある。前稿「語連接上の音韻現象」につづくもので、「浮世風呂」「浮世床」に見える江戸の下層社会語であるアイ〉エーなどの理象を細緻にとらえその音を論じたもので、個別的な小さなことには問題もあろうが、新しい江戸語研究の方向を示した好論文である。同氏「江戸語の様相――戯作文学にあらわれた――」（文学、十月）は、「浮世風呂」などより江戸語の様相をたずねたものである。河野亮氏「音韻から見た『初心仮名遣』」（音声学会会報、八十八号、七月）は、同書に見える音韻現象の分析であるが、その語彙をすべて当代の共時的なものとして扱うことにはいささかの危険を感じよう。

文法関係はまず西鶴があげられる。杉本つとむ氏「西鶴作品の国語学的考察(一)」（西鶴研究、八、十月）は、文法ばかりではないが、その特徴を総観した力作である。たゞ方法論的に、たとえば「なるほど」などの語法は中世語とも関係することで、西鶴独特のものをどこに設けるかは、――三十年度の西鶴論争にも関係することではあるが――問題があろう。森修氏「西鶴の文体の時代的意義」（国語国文、三月）は、その文体的把握であり、同氏「西鶴の解釈文法」（時代別解釈文法、作品別解釈文法、七月）は、その語法研究の現状が概観できよう。なお西鶴作の真偽をめぐって森銑三氏によって提起された問題は波瀾があり、語法・用字などにわたっているが省略に従う。たゞ諸家の反論するように当時のありふれたものが真偽のきめ手になりうるかどうか疑わしい。斯林不二彦氏「『浮世床』を通して見たる主語指示の助詞『が』と『は』」（国語国文学試論、一、七月）は、同氏の前稿文末助詞の考察にくらべて説得力がすこし弱くはなかろうか。三宅武郎氏「おくの細道の文法」（解釈、一の二、六月）もあった。吉川泰雄氏「接続助詞『から』と慣用語『からは』」（国語研究、三号、七月）は、両者の起源・用法からその交錯のなかったことなどを例の克明な調査によって推考している。石垣謙二氏「助詞の歴史的研究」（岩波書店、十一月）の、「助詞『から』の通時的研究」にも関連した問題はあ

るが吉川氏のは室町以降にくわしい。山崎久之氏「国語の待遇表現体系とその歴史」(国語学、二十一輯、六月)は、歌舞伎狂言本などからその敬語体系をとらえようとする新しい問題の設定であり、辻村敏樹氏「現代敬語の一傾向―いわゆる行き過ぎについて」(国文学研究、十二輯、八月)には近世語の引例がある。島田勇雄氏に湯沢氏「江戸言葉の研究」の書評(国語と国文学、四月)があり、湯沢氏「徳川時代言語の研究」再刊(風間書房、十月)は、古書肆泣かせでもあった。

文字関係では、杉本つとむ氏「西鶴及西鶴作品の用字について」(国文学研究、十二輯八月)があり、前年につづいて精力的に調べてある。滝田貞治氏の旧考にも説き及んでほしかった。

語彙関係は微視的なものにわたって行った。池上秋彦氏「江戸語研究断片」(桐朋女子学園紀要、四集、五月)は、小咄による「女房」の発音と「欠落」の意味をたずねたものであり、前田金五郎氏「西鶴語彙考証(四)」(西鶴研究、八、十月)は、一目玉鉾の外地・世界の図、同氏「『西鶴大矢数』用語管見」(国語、三の四、七月)は、座敷もち・杉焼について例によって該博な考証を示し、小野晋氏「『利休』といふ語について」(近世文芸、二号、十月)も新見である。永野賢氏「天ぷら論義」(教育手帖、五月)は、通説の外来語源を疑っている。板坂元氏「『奥の細道』小見」二・三・四(成城文芸、二号、一月・四号、七月・五号、十月)には、清濁など用語に関する考察もある。村内英一氏「やにこい攻」(和歌山方言、六、七月)もあった。今のところ至便な大曲駒村氏「川柳辞彙」が「川柳大辞典」上・下(日文社八月)として再刊された。現在の川柳語彙の研究は一段と精緻なものに進んで行こう。根岸川柳氏「古川柳辞典」第一巻(日本新聞社、七月)は、あまり買えない。雪村史陽氏「大阪方言事典」(杉本書店、十二月)は、近世語研究の参考となろう。

東国方言関係では、金田弘氏「東国語脈で書かれた抄物二三―江戸初期東国方言研究資料―」(国語学、二十輯、三月)は、希覿の抄物「大淵代抄」などについての調査であり、池上禎造氏「妙続大師語録の抄―江戸時代初期東国文献―」(国語国文、十一月)は、新出の抄物についてである。ともども学界に与えた影響は大である。なお四つ仮名のハヅ・ナメクジには問題もあろう。中村通夫氏「入間言葉」(解釈、一の一、五月)は、これを人為語とみなすものである。

外国関係では、森田武氏「『捷解新語』成立の時期について」(国語国文、一月)は、新資料を駆使しての従前の説を破る確論である。杉本つとむ氏「ツンベルクの日本語観察」(国語学、二十一輯、六月)は、仏訳本による紹介である。佐野英一氏「初期訪日英人の日記」(成城文芸、二号、一月)は、セイリス、コックス、同氏「開国期の日本を伝える英米人の日記及び日記的述作」(成城文芸、三号、四月)は、オルコックが扱われていて参考となろう。斎藤信氏「再び『波留麻和解』の異本について」(金沢大学法文学部論集、三、十二月)は、前年につづいて最初の蘭日辞典へのあくなき探求である。

資料では、長沢規矩也・川瀬一馬・中村幸彦三氏による「大東急文庫目録」(一誠堂、八月)は、近世文学書収載の圧巻である。古典文庫では「本朝桜陰比事」(五月)「男色義理物語」(十二月)「色道大鏡」(二月)があり、近代文芸資料では宮尾しげを氏「近

世笑話本集」（二月）吉田幸一氏「近世怪異小説」（奇異雑談集・善悪報ばなし・霊怪艸）があり、吉田氏のお仕事には全く頭が下る。目加田さくを氏「奇異雑談集の語彙について」（文芸と思想十号、七月）は、天理本についてであり、前者は吉田本である。高羽五郎氏「譬喩尽」第四巻（江戸中期のもの）があり、吉町義雄氏「滑稽酒落一寸見た夢物語」（文学研究、五十二輯、六月）は、佐賀方言で記されたもので珍しい。横山重氏「好色一代男」（岩波文庫、五月）は、文庫本でも国語学はできるかに答えようとしている。

近代

従来未開拓の面の多かったところである。音韻では、松村明氏「江戸語から東京語へ」（国語と国文学、十月）は、ヘボンの記述などから両者の音韻の相違についての新な論考である。文体関係では、やはり二葉亭が中心である。小林茂大氏「二葉亭四迷の言文一致体とその影響」（山口大学教育学部研究論叢、五の一八月）は、「浮雲」の文体的特徴とその翻訳文の影響についてであり、松下貞三氏「近代文体の創始――主として二葉亭における問題」（日本文学協会）日本文学、四の六、六月）(二)（同四の七、七月）も、「浮雲」などの語彙・文体をするどく掘りさげたものである。しかしこの協会に属する人々のいう「近代」「前近代」の概念の文体論的解明はこれで十分なのであろうか。言語生活では、池上禎造氏「明治以来の正書法」（言語生活、七月）は、文字づかいについての考察である。翻訳語関係では新な業績が加わった。森岡健二氏「訳語の変遷――語構成を中心として――」（東京女子大学比較文化研究所紀要、一号、九月）は、明治大正期の英和辞典の訳語語彙について綿密に統計比較したもので、近代訳語の問題のみではなく及ぼすところが大である。このたびはアト・ランダムの方法によっている。広田栄太郎氏「世紀といふ訳語の定着――近代訳語考3――」（国語と国文学、十月）は前稿「接吻」「彼女」につぐもので広田氏らではの博引が目立つ。門前真一氏「新訳聖書に於ける訳語『主』」（四）（天理大学学報、十七輯、三月）（五）（同、十九輯、十二月）は、二年がかりで完結した長大な論文である。訳語の問題からさらに原典、宗教などの問題にまで至る広い射程を含んでの論で、これまた新領域を切り開いた。資料の扱いについては、池上禎造氏「明治前期国語資料の処理」（国語国文、四月）がある。長年氏が手がけている言語生活の上から論じてあり、その資料の処理にあたっては幅のあることが暗示されていて興味が深い。

国語学史

部分的には顕者であったが、不振の面もあるようである。

単行本では、小島好治氏「現代国語学史」（鎌倉印刷出版、八月）は、前著「国語学史」につぐもので、「国語のため」より昭和十一年にいたる国語学書の解説である。未知の書へのよき手引とはなろうが、学史と言えるかについては疑念がある。「明治以降国語学関係刊行書目」（国立国語研究所資料集4、秀英出版、六月）は三百頁の単行本である。昭和二年時枝誠記氏に同種のものがあった。田辺正男氏「文法学説史」（国語学、二十三輯、十二月）は、要を得た入門講座でまま氏の新見をまじえている。「あゆひ抄」の研究はまことに盛であった。竹岡正夫氏「『あゆ

ひ本抄』考」（国語、三の四、七月）は、「あゆひ本抄（もとの）」の内容などについての推論である。酒井秀夫氏「あゆひ抄の稿本について」（金城学院大学論集、五、四月）は、富士谷家に伝えられた新発見の稿本についての耳新しい報告である。竹岡正夫氏「稿本あゆひ抄と刊本あゆひ抄の成立」（国語学、二十一輯、六月）は、さらにそれを深化し稿本の価値や刊本の成立過程にまで論及したものである。同氏「あゆひ抄術語考」（香川大学学芸学部研究報告、五号、三月）は、難解な成章の用語解説であるとともに氏の文法論がうかがえる。このところ矢つぎ早の竹岡氏の成章研究はまことに目ざましいものである。佐田智明氏「あゆひ抄の『立居』と『本言』」（語文研究、三輯、十一月）は、『本』などの語性を稿本などより追求したもので方法も犀利である。根来司氏「保田光則の敬属―敬語研究のない富士谷学派―」（謄写、四月）は、「脚結抄増補」のくわしい紹介である。成章についで義門もとりあげられた。三木幸信氏「類聚雅俗言」（女子大国文、二号、七月）は、今まで不明であった本書についての適切な解説である。同氏「義門の活用研究に関する一考察」（京都女子大学紀要、十一巻、十月）は、八衢疑問、詞の道しるべについて従前の説を正し、その活用研究の意義がのべてある。多屋頼俊氏についで三木氏を迎えたことは義門研究がますノ〳〵充実して行こう。花田一重氏「国語学者義門と関亀翁」（解釈、一の八、十二月）もあった。野村貴次氏「北村季吟年譜稿」（六月）は、その二百五十年忌を記念したものだが、精密である。時代が新しくなっては、村内英一氏「明治時代の仮名遣問題」（和歌山大学学芸学紀要、人文科学Ⅴ、三月）は、当時の状勢がよく概観されている。また、「漢文学、四輯」（福井漢文学会、十月）には、岡井慎吾博士の伝記など、「国語国文、十一月」「訓点語と訓点資料、四輯」（五月）には、吉沢義則博士の著述目録などが載せられている。

古辞書の研究には瞠目するものがあった。川瀬一馬氏「古辞書の研究」（講談社、十一月）は、十年前にほゞ成稿したものではあるが、全国公私の秘庫をくまなくめぐり、室町末までの辞書を総体的に研究した大著で、書誌にくわしく、国語学に貢献するところ大きい。（その評には人があろう。）「節用集類仮目録」（亀田次郎氏旧蔵）（国立国会図書館、謄写印刷、十月）は、二百四十二種類をふくんだもので、この碩学が偲ばれるとともにその公刊が待たれる。「日本の辞書展示会目録と解説」（国立国会図書館、十月）は、小冊ではあるが重宝である。

個々の研究について見て行こう。中村璋八氏「神宮文庫本五行大義背記に引存する東宮切韻佚文について」（東洋学研究、十一号、十月）は、穂久邇文庫の模写本からではあるが、「東宮切韻」佚文収載の最多のもので、岡田希雄氏による再三の佚文研究に裨益を与える。

「類聚名義抄」の研究には、「類聚名義抄」（漢字、仮名索引）（風間書房、六月）が、漢字索引を完結して再刊されたのはありがたいことであった。巻末に中田祝夫氏「類聚名義抄使用者のために」「補遺」があり、その概説や慈念その他の学僧についての新考や年表がある。（類聚の「聚」にはジュウの音もなくはない。）名義抄については吉田金彦氏の年来の労作がある。「類聚名義抄小論」（国語国文、三月）は、その組織内容や史的背景を探ったもの、「図書寮本類聚名義抄出典攷」（下の一）（訓点語と訓点資

料五輯、十月）は、清水谷旧蔵本の出典研究でこのたびは国書関係が多い。岡田氏の業績からここまで至ったかの感がある。吉田氏「資料紹介・成唯識論音義について」（国語国文、十二月）は、大屋本および明意のものの紹介である。

貞刈伊徳氏「世尊寺本字鏡について」（国語学、二十三輯、十二月）は、新撰字鏡などの先行辞書と関連があることの精査である。なお、川瀬氏のごとくあまり密接な関係をみとめないことへの反論も用意してほしい。山田俊雄氏「色葉字類抄畳字門の訓読語の性質—古辞書研究の意義にふれて—」（成城文芸、三号、四月）は、一部の採録語彙に漢文訓読語のあることより本書の性質と当時の言語生活を明かにしたものである。なお「伊呂波字類抄」（第二巻）（風間書房・八月）の再刊があった。辞書史に関して、築島裕氏「辞書史と片仮名」（国語研究、四、六月）は、辞書の倭訓に片仮名を用いるにいたった経緯であり、吉田金彦氏「国語学における古辞書研究の立場について—音義と辞書史—」（国語学、二十三輯、十二月）は、辞書史における意義の位置を考え、言語生活の上から見るべきとの論で山田俊雄氏の論ともかゝりあう。「韻鏡」については、福永静哉氏「吉沢博士旧蔵韻鏡の書誌学的研究」（女子大国文、二号、七月）は、博士旧蔵の伝享祿本などについて馬淵和夫氏の韻鏡校本とくらべたものであり、福永氏「韻鏡新釈」（あそか書林、謄写印刷、十月）は、博士旧蔵（船橋家旧蔵）永祿七年本をもとにしたもので索引もついている。また諸橋轍次氏「大漢和辞典」第一冊（講談社・十一月）は、全巻十三冊、日本学者の偉業である完遂が待たれる。

本稿を草するにあたり、築島裕氏による「解釈と鑑賞」誌上の展望記事の一部は便益が多かった。

—都立南多摩高校教諭—

五、方言学

都竹通年雄

一、あらまし、そのた

昭和三〇年秋、アメリカから李方桂先生がいらっしゃった時、服部四郎先生は李先生に向かって「国立国語研究所の研究はあまりにも統計学的であって、言語の構造の研究を軽んじている。日本にはたくさんの方言研究家がいるけれどその研究はきれぎれな(Sporadic)ものであって、体系的なものではない。ほんとうの、構造的な体系的な研究はこれから現れるだろう。」と、またグロータース先生は「日本に柴田武氏などの研究家がしっかりした研究をしている。」とおっしゃった。（なお「言語生活」昭和二八年九月号の服部先生の「方言研究私見」をも見てください。）

さて、日本のたくさんの研究家の長年の涙ぐましい努力にもかかわらず、理想的な方言書はまだ日本には一冊もない。数十年前から今に至るまで方法論の議論で堂堂めぐりをやっている。しかし、毎年現れるおびただしい論文のうち一部分をでも読めば、日本の方言学の水準は、わずかずつではあるが一年一年と着実に進歩していることがわかる。

日本でのこの方面のカナメと言うべき国立国語研究所の地方言